

虚無之王

おにぐも

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第40刃、ウルキオラ・シファー

これは、彼が「心」について知った、その先の話

目次

転生、魔王になる	1
原初の赤	12
バイト、新入り	21
旅の終わり、魔王達の宴	33
開国祭	47

転生、魔王になる

ここはどこなのか。

彼は思考する。

ここに同族はいない。

ここは前の世界ではない。

そう、彼はすでに死んでいる。

そして同刻、銀世界に住む悪魔は、己に達しうる力を持つものの現れを感じて、その赤髪を揺らし、笑う。

※ ※ ※ ※ ※ ※

俺の名は、ウルキオラ・シフアー。

藍染様によって創られた十刃が一人、エスパーダ第4十刃だ。

俺は藍染様の命により虚ウエコムンド圈にある虚夜宮と井上織姫という女を守っていたが、侵入者の死神である黒崎一護の手により殺されたはずだ。

しかし俺は今生きている。

ここにはなぜか破アランカル面や虚ホロウ、死神の気配でさえ全くと言っていいほど感じない。

代わりに俺の知らない気配や唯の人間の気配ならあるが。

また、ここには尸魂界も虚圏も存在しないようだ。

霊圧のようなものはあるが、霊圧とは少し違う。

おそらく俺が死んだという事実は変わらない。

ここはあの世界とはまた別の世界、破面や虚、死神が居ない世界なのだろう。

俺の今の姿は、帰刃前の通常の姿だ。

斬魄刀は左腰に健在。

前の世界と容姿は変わらず戦闘力も変化なし、むしろ強くなっている。

「4」の数字は消えているがな。

この世界には「スキル」というものがあるようだ。

前の世界では当たり前だったこともほとんどがスキルとなっている。

また、前の世界とは少し違うと感じた霊圧はこの世界では魔素というものらしい。

霊圧感知は「魔力感知」、霊圧操作は「魔力操作」といったようになっていて、ソニード響転や虚閃、セロ帰刃、レスレクシオン・セブンダ・エターバ刀剣解放第二階層などは普通に使用可能のようだ。

超速再生能力は「無限再生」となり、脳や臓器も再生可能。

そもそも俺自体が精神生命体とやらになっており、死んでも死にきれない体のようだ。

俺自身の事についてもまだ知らない事はあるだろうが、前の世界とこの世界の違いも詳しく知っておかなければならない。

俺は死ぬ直前に、「心」というものを少し理解した気がする。

以前の俺は何も無かった。あの女や死神のおかげというのは癪だが、この世界で俺はさらに「心」についての理解を深められると思った。

目的がある以上、俺はこの世界で生きなければならぬ。

その割に俺はこの世界について知らなさすぎる。

俺が今居るのは巨大な森の中だ。

一先ず人間共の居る場所に行くとしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※

やはりこの世界に破面や虚、死神はいないようだ。

だが唯の人間以外にも、人間と獣が混ざった獣人や、魔物、悪魔といったものが居るらしい。

ここは知らない地であるし今回は観察のみのつもりだったので魔素は抑えていたが、どうやら悪手だったようだ。

俺の容姿は魔物に見えるらしい（間違っではない）。

見たことないが（当然だが）弱そう（魔素を抑えているからな）だからと、俺に襲い掛かってくる者共が居た。

無論、俺からしたら唯の塵に過ぎないが。

人間とは理解出来ない。

あちらから来たにも関わらずどういふ訳か俺は討伐対象と見なされたようだ。

あのような雑魚共を殺すことで危険視されるとは俺も思っても見なかったが、この世界の人間の實力を図るのには丁度良い。

「弱すぎん@……」

思わずそう呟いてしまうほど。

雑魚の死神よりも雑魚だ。

俺の中でこの世界の人間の戦闘力は底辺に値すると確信した。

俺の辺りには大量の死体が転がっている。

見慣れた光景だな。

塵共がどれだけ掛かってきても無駄なので、俺の能力の実験に使用した。

結果は虚閃を幾つか撃てば国が消滅したので帰刃の能力確認などは出来なかったが。

ちなみにこの世界でも響転は感知されないようだ。

国が消滅してはもうする事もないので、森に戻ろうとした。

異変。

すぐさま後ろに飛ぶ。

俺が先ほど立っていたところに現れたのは、赤髪の男。

人間ではない。

「俺は魔王ギイ・クリムゾン。お前、魔王になれ」

俺からしたららぶざけた事を言っているようにしか聞こえないが、この男は間違いなく強い。

それほど実力が離れているという訳ではないが俺より強い事は間違いない。

先の塵共とは比べ物にならない。話を聞く価値は大いにある。

「なぜだ」

「端的に言えば、お前が人間の国を一つ滅ぼしたからだな」

「あの雑魚共を殺したのがどれほどなのか俺には理解できないが、俺が魔王とやらになつた時のメリットは何だ」

「そうだな、お前は生まれたばかりだろう。魔王になればお前の言う雑魚共、つまり面倒な奴等に態々メンチ切られることもないし何より自分の住む場所が得られるな。正直に言えば、お前が魔王側の、というか俺の戦力になるからだ。話すつもりは無かったがお前は俺とほぼ互角のようだしな」

「馬鹿を言うな。お前の方が強いだろう。あと俺はお前側の事情に興味はない。だがまあ、俺の目的のためにも特定の場所で静かに過ごせるといいのは良いな」

「この世界にもやはり俺より強い奴は居た。この男がこの世界で最強クラスなのはわかるが、このレベルが他にどのくらい居るのかはわからないし余計ないざこざは面倒だ。」

俺は目的が果たせればそれでいいしな。

「……………わかった。魔王になろう。ただし、俺の目的を邪魔すれば殺す」

「フツ、強気だな。お前は4人目の魔王になる。特にこだわりも無さそうだしお前の領土はこちらで適当に決めておくが、いいか？」

「ああ、助かる」

「お前と俺以外にあと二人魔王が居るんだがな、そいつらは放っておくと勝手にお前に会いに行きそうだからこちらから紹介しに行くぞ」

「、今からか？」

「当たり前だ」

他の二人とやらは十刃のように脳筋なのだろうか。そうでない事を願うばかりだ。そういえば、俺はまた「4」らしい。

特に関係もないが。

※ ※ ※ ※ ※ ※

「おお！お前がギイの言っていた面白い奴なのだな！」

俺が室内に入ったと同時にそんなことを叫ばれた。

「誰だ」

「おお、すまん。ワタシは魔王ミリム・ナーヴァ。初めましてなのだ！」

言動は子供っぽいが此奴も強い。ギイと同じぐらいだな。

「お前は何て言うのだ？」

「そういえば俺も名前聞き忘れてたな」

確かに、向こうには名乗られたが俺はまだ名乗ってないな。

「俺の名はウルキオラ・シファー。今日から魔王になった」

「アンタ不愛想ね。アタシは魔王の一人、ラミス！あんたはギイと同類のヤバそうな

匂いがするから、ふざけようと思ったけどやめたわ。この精霊女王様に感謝しなさい！」

ふんぞり返ってそんな事を言うのは、黄色い髪の毛の小さい精霊。こちらはまず間違いない弱く弱い。

しかもふざけるのをやめたといっているが説得力はゼロだ。

「ギイ、こいつは何だ」

「何だとは何よ！失礼なヤツ！」

「此奴も元は強かったんだがな、俺が暴走したミリムの相手をしていた時に力を使って俺達を止めたのさ。色々あって此奴は堕ちて魔王になったって訳」

「アタシだって今は弱いけど、全盛期の時は凄く強いんだからね！」

「……そういうのは自分で証明しろ。お前の全盛期とやらの興味が無い訳でもないがな」

「フフン、アンタもちよろいわね！」

此奴とはまともに取り合わない方がいい。自分勝手な十刃を思い出すな。

「まあそういう訳だ。此奴は何か目的があるらしく其れを邪魔したら殺すのだと」

「何よそれ!?目的がわからなきや意味ないじゃない!その忠告」

「静かな時に煩くしないでくれれば其れでいいが、まあギイやミリムだったら別にいい。」

「そもそも殺せるかわからないしな」

「え、ねえ、アタシは？」

「ラミスは殺すまでもない」

「ひどい！ギイ、ミリム、何とか言っつてよ!!」

「うはははは！仲間外れは良くないぞ！ラミスには友達がいらないからな！」

「其れを言うならミリムもでしょ！」

「ふ、ふん。………ワタシにはウルキオラがいるぞ」

「俺はお前等の友達ではない」

「そうよそうよ！抜け駆けは許さないわよ、ミリム！」

此奴らは煩いが、悪い気はしない。まあ此れを四六時中続けられたら困るのだが。

「まあ、こいつ等はこんなんだが魔王だ。これからよろしくな」

「ああ」

「あと暇だったら俺と戦ってくれ。ラミスは今は無理だしミリムは馬鹿だからな」

「苦労性だな。腕を訛らせないためにも丁度いいかもな」

「では、これにてウルキオラの紹介は終いだ！」

それからギイに俺の領土を教えてもらい、ラミス、ミリム、ギイと別れ俺は領土に向かった。

ついでに茶会の会場への転移道具をもらった。

これから魔王が増えるのかはわからないが、脳筋はやめてほしい。
そんなことを秘かに思った。

原初の赤

俺は領土に着いてすぐに能力の確認を始めた。

ある程度わかっただけはいるが自分の力であるのだから誰よりも詳しく知っていなければならぬ。

俺の種族は破面アランカルということになっている。

種族と言っても俺以外にはいないがな。確か竜魔人ドラゴノイドもミリム一人だったか？

固有スキルは『無限再生』『万能感知』『魔王覇気』

魔力感知は万能感知の一部のようだ。

ユニークスキルは『虚閃セロ』『虚弾バラ』『反膜ネガシオン』『探查回路ベスキス』『鋼皮イエロ』『超速再生』

究極能力は『虚無之王』
アルティメットスキル

【思考加速】 【解析鑑定】 【森羅万象】 【未来予知】 【響転ソニード】 【黒翼大魔】 【黒虚閃セロ】
グラン・レイ・セロ レスレクシオン・セクンダ・エターバ ムルシエラゴ ソリタ・ウイスタ オスキュラス

【王虚の閃光】 【刀剣開放第二階層】 【虚数空間】 【多次元結界】 【共眼界】

前の世界とほとんど同じだ。思考加速や虚数空間、未来予知は便利だな。

戦い慣れている能力が多いから詛することもない。だがとりあえずギイが居ると言っ

ていた氷土の大陸に行くか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

一面の銀世界。辺りは全て氷で覆われている。何も存在しない、それほどに静かな空間。

そこに佇む城。ひどく幻想的なセカイ。

虚圏を連想させるような景色。感覚。とても懐かしい。

「よお、さつき振りだな」

銀世界に浮かぶ二つの存在。

一人は赤。ロード・オブ・ダークネス 暗黒皇帝の二つ名を持つ原初の悪魔。そして真なる魔王の一人。深紅の髪を揺らし、其の名に相応しい傲慢な笑みを浮かべる。

一人は黒、いや、白とも言える。この世に唯一の破面。真なる魔王の一人だが、まだ二つ名はない。黒髪の左部に白い仮面を身につけ、目の下には翡翠の仮面紋エステイグマが現れ、その首下に空く漆黒の穴は、虚無。表情は氷の様に冷たく、動かない。

正反対。それは外面だけではない。

一人は好奇心旺盛。一人は一つの物事に忠実。

だが、本質は同じ。

この世界の強者であり、自らの目的を果たすために動く者。

一人は、自分の飽きを補うために。一人は、自分の感じたモノを信じるために。
「能力の確認は終えた」

黒髪は言う。

「そうか。つまり戦いに来たってことでいいんだな？」

赤髪は其の口元を樂しげに歪める。

「ああ」

黒髪も無表情に應える。

「ここだったらある程度俺たちが本気を出して戦っても影響はないだろう。まあ一応結界は張るけどな」

「そうか」

そう、彼らが本気で戦えば、それはこの世界に多少なりとも影響を及ぼすだろう。それ程の最強格。

この世界の頂点である創造主に最も近い才を持つものなのだ。

「鎖せ『黒翼大魔』」

黒髪が言う。

其れと共に辺りを渦巻く膨大な魔素。手には光の槍。

赤髪は油断なく笑う。悪魔たるもの怯えることはない。

「へえ、其れがお前の能力か」

赤髪は悟る。これは究極能力ではあるが種族固有の能力でもある。これをコピーしても精々力が増すのみだ。

黒髪は悟る。帰刃を使用しても勝利には及ばない。それ程相手は強者であり、己の認めるべき者であるということ。

唯両者とも考えることは同じ。互いに強者であり慢心など不要。只々思うがままに戦う。

セロ・オスキユラス
「黒虚閃」

これは開戦の合図であり、お互いに気を向けていない。にもかかわらず、其の黒い光線がたどった場所には大地がむき出しになる。

ただ静かな空間に、突如として鳴り響く轟音。

其れは単に剣と槍が交わった音。強者同士の戦いにして成せる音である。

ナバームバースト
「熱龍火覇」

「虚弾」

爆煙。しかし両者は止まることを知らない。

「ルス・デ・ラ・ルナ」

「フツ、中々やるじゃねえか」

「受け止めている癖によく言う」

確かに黒髪の技は強かった。普通ならば一撃だろう。普通ならばの話だが。

現在の素の実力は赤髪の方が上であり、彼の持つ剣は神話級である。

「お前の強さはまだまだこんなものじゃないだろ？」

「言ってくれるな。だがいくら同じ魔王と言えどそう簡単に手の内を見せる訳にもいかない」

そう、普通手の内とは相手に見せないものである。其の言い分は赤髪も納得出来るものであった。

「じゃあここで止めておくか」

「ああ、其の方がいいな」

お互いに理解していた。自分と同等に戦える者などそうそう居ないと。これ以上戦えば世界への影響など頭に入らなくなるかもしれない。

故に、互いの意見は一致する。

「久し振りに楽しかったぜ」

「そうか」

赤髪は笑う。良い退屈しの手になったと。

黒髪は思う。これが楽しいという気持ちなのだ。

お互いに目的は満たした。

こうして魔王同士の壮絶なる戦いは終わりへと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※

ギイと戦った。予想通りだったとは言え、フルゴールを受け止めたのには少し驚いた。

ギイには二段階目はまだ見せないほうがいいだろう。存在自体は気づかれていそうだがな。

「お前に紹介する。ミザリーとレイン、俺が前に召喚した悪魔だ」

ここは白氷宮というらしい。

緑の髪と青の髪か。少しカラフルだな。

「あら、ギイ。新しい客が来ているのなら私も紹介してくれたっていいじゃない」

突如として現れたのは真つ白な女。まあ何か来るのはわかっていたが。

此奴は強いな。ミリムに少し近い雰囲気がある。

「私は〃白氷竜〃ヴェルザード。あなたが新しい魔王ね」

「ウルキオラだ」

「これで大体の紹介は終わりだ。他にも悪魔は居るが紹介する程でもないだろ。そういうば、お前は従者は作らねえのか」

「今は必要ない。必要だと思つた時に作ればいい」

今は従者が居てもいいことはない。逆に守られたりするのは面倒だ。

「フツ、お前らしいな。」

レインとやらが紅茶を持つてくる。流石というか、美味しいな。

「お前はこれからどうするんだ？俺は適当に魔王を集めるつもりだが」

「俺は目的を果たすだけだが、時間がかかるモノだから忙しくはない。むしろ暇だな。人間に擬態でもして旅でもしようと思う」

「お前の目的って何なんだ？」

「ああ、「心」を知ることだ」

「へえ、其れだつたら旅をするのはいい選択かもな。お前が知りたいモノは一人では知ることが出来ないだろうからな」

言われてみればそうだ。俺はあの女や死神に会うまで、全く理解出来なかった。

多民族との交流か。其れを考えれば従者の一人ぐらい居てもいいかもしれない。

「ギイ、先程お前は魔王を集めると言っていたが、もう少し知性的なのを頼む。あれらが増えては煩い」

「其れは保証できねえな。一応気には止めておくが。まあ其の気持ちが変わらないわけでもない」

憂鬱というのは嫌な気持ちだ。

「ああ、旅をするんだったらこの間渡した茶会の会場への転移道具なくすなよ」
「わかってる。ではまたな」

旅と言ってもまず俺は人型になれるのか。其の練習からだな。

暇ではあるが、俺が破面になる前の虚無感に比べたらマシなものだ。其の面ではミリムやラミリスの様な煩い奴らにも助けられているのかもな。

「……………心か、あいつの究極能力は恐らく『虚無^{タルタロス}之王』。虚無が心を知るとは、難儀なも

バイト、新入り

人型になる、と言うが俺は人型になれない。

まず俺に擬態など出来ない。ギイによれば、幻覚魔法とやらで人間と思わせるのが良いらしい。

俺の場合は詠唱などせずに姿を想像するだけで可能のようだ。

とりあえず仮面と仮面紋エステイグマ、孔を無くせば人間らしくなるだろう。

ついでに魔素を押しえておく。今回は人間に視えるだろうから襲いかかれることはないはずだ。

今回の旅の目的は、多民族との交流で「心」をより深く知ること。とりあえず色々な者と交流を持てばいいか。

人間とは面倒臭い生き物だから、こちらから問題は出来るだけ起こさないほうが良いだろう。面倒だ。

※ ※ ※ ※ ※ ※

武装国家ドワルゴン。ここでは国内での争いは禁止されている様なので丁度よい。

人間共以外にもドワーフやエルフなどが居るようだ。

所々から金属音や飯の匂いがしてくる。何より煩いのは話し声だ。煩くはあるが、こ
こなら他の国の情報も多く集まるだろう。

鉱山の影で薄暗いのかと思つたが住んでいる奴らはひどく活氣的だ。

多民族との交流というのは良くわからないがとりあえず適当な建物に入るべきだな。

カランカラン

扉に鈴が着いていて開けると音がなる仕組みか。音を鳴らさずに入ること出来な
いことはないが、よく出来ているな。

まず目に入ってきたのは銀色に鈍く光る物。

この店は武器屋のようだ。俺以外にも冒険者?と思われる奴らが居る。

武器屋という訳で多くの武器が売っているな。流星に俺の光フルゴールの槍やギイの持つてい
た神話級ゴツズとやらはないが。

だが幾つか他の武器とは違う物がある。これはおそらく作る際の材料が違うのだら
う。武器に魔素がこもっている。

「お。その兄ちゃん、目の付け所がいいな」

この店を経営していると思われる奴が話しかけてきた。まあ当たり前だが敵意はな
いな。

「これは魔法武器マジックウェポンといってな、魔鋼が使われているのさ。」成長する武器とか言われ

ているな」

この世界には其の様な物があるのか。多民族との交流以外にもこの世界について詳しく知るといふ目的が増えたな。

「其の中でもこれは特に自信作でな、スベシヤル特上級の武器だ。お前さんはこれの凄さに気づいてくれたしな、少し安くしてやってもいいぞ」

スベシヤル特上級と言つても、おそらくゴツズ神話級には遠く及ばないのだろう。一目瞭然だが。

しかし此奴は余程馬鹿なのか。自信作のなら普通は安くしないだろう。よくわからないやつだ。

「おーい、聞いてるか?」

「!ああ、濟まない。悪いが俺は今ほとんど金を持っていなくてな。其の武器は買うことは出来ない」

そう、俺は特に金を持っていない。国を滅ぼした時は硬貨も燃えてしまったようだしな。

「そうか……。お前さん、よく見たら少し青白いし大丈夫か?何かバイトでも探してやれたらいいんだが」

「バイトだと?」

「ああ、飲食店とかなら働けばいくらか硬貨が貰えるぞ」

ふむ、適当な冒険者を国外で殺すしかないと思つていたが、其のバイトとやらをすれば多民族との交流やこの世界の情報収集、金を稼ぐことも出来るだろう。

これはやるべきだな。ずっと建物を出入りしている訳にもいかないし丁度良いか。

「すまない。良ければ紹介してくれないか？」

「ああ、いいぞ。お前さんその様子だと宿も取つてないようだからな、宿舎付きのバイト先を紹介してやろう。金が溜まつたらまたここに来て武器を買つていけよ。これは其れまで取つておいてやる」

「ああ、助かる」

なるほど、紹介代がこの店の武器を買う、という事か。

「ここがくくく。くくく。くくく」

にしても此奴は気前が良すぎるような気がするが。この国の奴らはこれが普通なのか。不思議だな。

「これでいいか？」

「ああ、ありがとう」

「次に会つた時は血色が良くなつてる事を祈つてるぞー！」

カランカラン

この状態は青白く視えるのか。まあそう云う体質という事にしておけばいいだろう。バイト先は酒場らしい。その店主もどうやら「とても良い奴」らしいが、其れを決めるのは俺だ。

だがまあ、交流というのは煩いし面倒だが、悪くはないな。

バイト先はここからそう遠くはないらしい。精々500mといったところか。

※ ※ ※ ※ ※ ※

ここが俺のバイト先か。道中にも似たような酒場や武器屋が多くあったが、其れ等と比べても少し大きめの店だ。

「お。お前が新しいバイトって奴か。確かに青白いな、大丈夫か？」

「唯の体質だ。問題はない」

「はっはっは！聞いていた通りの奴だな。こんな根暗がここで働けるのかと思ったが、十二分に気は強そうだな。歓迎するぞ。お前の宿舎は後で紹介するから、とりあえず早速店を手伝ってくれ。よろしく頼むぞ」

「ああ、よろしく」

俺は根暗だと思われていたのか。やはり青白いからなのか。まあ体質で通るのなら其れでいいが。

ここは酒場のように冒険者が多いな。満席のようだ。

「おーい！ボサツとしてるんじゃないやねえぞー。とりあえずこの肉運んでくれ！」

「ああ、了解した」

言われて行動しているわけだが、命令に従っているといった感じはしないな。

それにしてもこの肉は美味そうだな。ここが繁盛するのにも頷けるな。

どうやらあそこの4人組のどこへ持っていけばいいようだ。パーティとやらだな。

「お。あんちゃん新入りか？」

「バイトだ。この店はいつも満席なのか？」

「いや、そういう訳じゃないぜ。実はこの間近くの国が丸裸にされてな、辺り一面焼け野原になってたのさ。新しい魔王が増えたって噂も流れるもんだから、冒険者の奴らは皆この国に武器を買いに来てる。今この国には冒険者がたくさんいるからな。一応国内での争いは無しになっているが、あんちゃん弱っちそうだし影で何かされないよう気をつけろよ」

「忠告感謝する。肉はここに置いておくぞ」

「ああ、ありがとな！バイト頑張れよ」

「ああ」

国が消滅したことはすぐに気づかれると思っていたが、魔王になったことにも気づかれるとは。

そう言えば、ギイが「魔王は人間共が傲慢になり過ぎないための見せしめでもある」とか言っていたし、必然か。これなら新しい魔王が生まれてもすぐにわかるな。

やはりここは情報収集には最適の場所のようだ。あの男には感謝をしておこう。

「おい、その奴！」

「なんだ」

「この酒をいくら頼みたい」

「ああ、わかった」

ここも終始煩いが、悪い所ではない。

うざい冒険者も居たりしたが、基本的にはお人好しな奴らばかりだ。

戦闘面ではありえんが、普通にすごしている分にはいいものだな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ここがお前の部屋だ。ちと狭いがそこは我慢してくれ。今日はいい働きぶりだったぞ。冒険者の絡みも楽にかわしていたし、お前優秀な奴だな」

「いや、俺を雇ってくれて感謝する。部屋は小さくても構わんしな」

「そうかそうか。じゃあ明日からまた頼むぞ！給料は机の上に置いてあるから、其れであいつの武器を買ってやってくれ。飯はうちの余りもんでいいならやるぞ」

「ああ。では飯は貰っておこう」

確かに部屋は小さいが、ベッドと椅子、机があれば十分だ。掃除も隅々まで行き届いているしな。

飯が貰えるというのは嬉しい誤算だ。あの男もいい場所を紹介してくれたな。やはりこの国の奴らはお人好しばかりだ。いい国だな。

銀貨3枚か。この世界では銀貨1枚で千円くらいらしいからな。店主も随分と奮発してくれたみたいだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※

あれから一週間程たち、今日は休暇だ。とりあえずあの店に武器を買いに行くか。

カランカラン

「お。久し振りじゃねえか、バイトは順調か？」

「ああ、あんたが紹介してくれた所はいい所だったぞ。今日は休暇だからあの魔法武器マジックウェポンを買いに来てやった」

「そうかそうか、今取ってくるからちと待っていてくれ」

あの武器自体のレベルは全くと行っていいほど強くないが、俺の魔素で改良するのもいいかもな。

「銀貨10枚だ」

「ああ」

「お前さん、巾着は幾つかに分けた方がいいぞ。今は冒険者が多いし、スリが多発してやがる。気をつけておけよ」

「忠告感謝する。記憶に留めておこう」

「おう！もう貸しもないが、良ければまたここに買いに来てくれよ」

「ああ、世話になったしな。またいい武器が出来たら買うぞ」

「ああ、また来いよー！」

カランカラン

「おい、茶会やるぞ。今すぐ来い」

！ギイカ。人使いの荒い奴だ。

まあ今日は休暇だし用事も済んですることもないから丁度いいか。

路地裏に行つて転移するか。この装置を使わないと場所がわからないのが面倒だ。

※ ※ ※ ※ ※ ※

ここはとある茶会が開かれる場所。

茶会と言っているが其れは彼らが思っているだけ。人々からすれば、恐ろしい裏の会

談と言つたところだ。

そこにいるのは、赤髪の悪魔。

そして、気怠げな印象の堕ちた天の使い。物静かだが巨大な体躯を持つ巨人族。

そして新しく加わったのが、黒髪の破面^{アランカル}。

最後に、桃色の竜魔人^{ドラゴナイト}と黄色い妖精族^{ピクシー}。

一見すれば異様な組み合わせだが、彼らには共通点がある。

それは、魔王であること。

堕天族と巨人族は新入りである。

今日はその報告に、彼らは集まったのだ。

「久し振りだな。まずは自己紹介だな」

赤髪が言う。その間を縫い、緑と青の悪魔が紅茶を運ぶ。

紅茶を運び終えた彼女らはまるで影のようにひっそりと、赤髪の側に立ち、存在を消す。

この場での彼女らは、弱い。立場、という意味もあるが、第一に実力だ。それ程に魔王というものは強い。

圧倒的強者の前で、弱者に為せる事などない。

「俺はギイ・クリムゾン。こいつらはミザリーとレインだ」

赤髪が名乗る。彼は最古で最強の魔王。

今回魔王たちを招集したのは彼であるため、進行も赤髪がする。

「ワタシはミリム・ナーヴァ。よろしくなのだ！」

桃色がいう。彼女も古参である。子供のような容姿と話し方だが、内蔵する魔素量は“無限”。彼女も最強格の一人である。

「アタシはラミスよ。新入りはアタシのことを敬いなさい！」

「ここでは一際小さな妖精が名乗る。反対に、態度はデカイ。」

「ウルキオラ・シファード」

黒髪が名乗る。先の3人の少し後に入った魔王。しかしその強さは彼らのお墨付きである。

「俺はディーノ」

墮天使は名乗る。名乗った後すぐに船をこき始めたが、其れでも彼の強さは本物だ。前4人、いや3人には及ばないが。

「ダグリユールだ。よろしくのう」

最後は巨人族。その巨躯に比例した膨大な魔素を内蔵する。墮天使同様前3人には及ばないが。

「紹介は以上だ。わかっていと思うが、今回招集したのは新入りの魔王が入ったからだ。ついでだが何か報告がある者は居るか？」

赤髪が問うが、応えるものは居ない。

「特にないな。では解散だ」

その一声を気に、其々が会場を出て行く。

「魔王が増えて嬉しいのだ！」

「お前魔王なのにチビだな」

「何をー!!アタシが本気を出せばアンタなんかちよちよいのちよいよ！」

「其れよりもダグリユール、今日も泊めてくれ」

「またかよ」

そんな話をしながら魔王たちは出て行く。

残るは赤髪と黒髪。

「久し振りだな、ウルキオラ。旅は楽しいか？」

「彼奴等は熟不思議な奴らだ。だがつまらなくはない」

「そうか」

「ギイ、俺はもう行くぞ」

「ああ、またな」

そんな会話をして黒髪は出て行く。

残された赤髪も、口元に笑みを浮かべ、従者を連れて出て行くのだった。

旅の終わり、魔王達の宴

あれから一年が経った。

ずっとバイトを続けていた肉屋の店主や、武器は買わないが立ち寄るだけ立ち寄っていた武器屋の店主とも懇意の間柄だ。

武装国家ドワルゴンは何も変わらず、相変わらず活気的な場所だ。

「俺はそろそろ次の旅に出ようと思うから、今日でバイトは終いにしようかと考えている」

ここを出るのが少し名残惜しい様な気がするが、ずっとここに停滞しては意味がない。

金もだいぶ集まったし次の国に行くべきだ。

「そうか、寂しくなるなあ。今日は抜き使うから覚悟しとけよ！」

「ああ」

寂しい、か。ここでも色々なことを教わったな。

「おーい！アンタ今日で止めちゃうんだろ？だったら折角だしここに居る皆で宴会でもやろうぜ！！」

「お〜」

誰かが叫んだと思えば、周りの冒険者たちも雄叫びを上げて一気飲みをし始めた。宴会をしてくれるのは俺は勿論のこと店の売上のにも嬉しいが、コイツラは馬鹿なのか。

「お前さんのための宴会なんだぜ！主役が働いててどうするよ。飲んだ飲んだ〜!!」
此奴は既に酔っているな。顔がアホ面になっている。

しかし最後のバイトなのに働くな、とは。どうしたものか。

「其れもそうだな。お前の今日の仕事は、店の売上に貢献するってことで！」
この店主も上手く纏めやがった。まあ店主本人が言うのならいいか。

俺は酒に強いし悪酔いもしないからな、今日くらい存分に飲んでやろう。

「ありがとう。とりあえずこの酒をいくらか頼む」

「お！兄ちゃん行くね〜！」

「当然だ。飲める時に飲んでおくべきだろう」

俺は煩いのは嫌いだ、酒が入れば多少は気にならなくなるしな。

楽しいことには違いないので、悪くはない。

※ ※ ※ ※ ※ ※

「お前以外皆ほとんどぶっ倒れてるじゃねえか」

「コイツラが酒に弱すぎるんだ。俺に勝つなど300年くらい早いな」
「ふははっ！そうかそうか。……寂しくなるな」

豪快に笑った店主だが、今日はいつになくしおらしい。

「ああ。だがこの国を出た後もここには寄ろうと思ってるからな、二度と会えなくなるわけではない」

次の国と言っても隣の国だ。距離はそう遠くない。俺からすれば、だが。

まあ色々世話になったしな。感謝ぐらいはしておくべきだろう。

「俺はもう行くぞ。世話になった。ありがとう」

「ああ！元気でな！」

俺がこの国の者を殺さなければいけなくなった時、今の俺に出来るだろうか。

いや、それは多分簡単に出来るのだろう。俺は虚無。心などない。殺す時は非常だ。

「心」を深く知れば知るほど、冷徹な感情も増えていく。俺にこの孔がある限り、俺が虚無であることに変わりはない。「心」も興味深いが、やはり俺は俺だ。

次の街に行くか。

※ ※ ※ ※ ※ ※

次の国は、この間俺が消滅させた国の後にまた立てられた国だな。名前は忘れたが。

人間共は馬鹿で理解できない生き物だが、技術力で言えば目を見張るものがあるだろう。ドワーフの技術力は素晴らしいと言われているが、人間も負けず劣らずだ。

ここは唯の人間の国のようなのだが。興味を引くものもないし適当に店に寄って他の国へ行くか。

カランカラン

一番人が多そうな所に入ったんだが、ここもどうやら冒険者御用達の店のようだ。

売っているのは回復薬。俺には全く必要ないが、金の使いみちにも困っていたし買うか。少し使ってみたいしな。余り質が良いとは言えないが。

「これを頼む」

「銀貨15枚です」

「ああ」

5本程買って見たが、少し高い気もする。

まあ回復薬というのは貴重なのだろう。人間は再生できないなんて面倒だな。

カランカラン

後は特に目立った場所はないな。

まあこの国はこの間立ったばかりのようだし、無理もないか。

さつさと次の国へ行こう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

次はイングラシア王国。ここには互助組織の本部があるらしい。噂だとトップは老いぼれで、権力に固執しているとか。

やはり人間は醜いな。

俺はこの世界で転生者というらしいが、俺以外に召喚者や異世界人という者が居るらしい。

召喚者は国に縛られており、異世界人は好待遇で傲慢さが滲み出ている。所詮人間の醜い姿でありギイ程ではないがな。

とりあえず宿に泊まろうと思ったが、この国も互助組合の本部があるということ以外に目立ったことはない。

武装国家ドワルゴンはかなり発達していたのだと思う。あそこを始めるの国を選んでよかった。

この調子だと旅もすぐに終わりそうですつまらないな。まあ旅が終われば自分の領地に帰って城でも建てておくか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

あれから5年。特に面白いこともなく、ギイに東の帝国には行くなと言われたおかげで俺は旅を終え、自分の領地に戻った。

ギイによれば普通は領地に住民が住んでいるが、俺は煩いのが嫌いだから住民が居ない所にしてくれたのだと。少しありがたいな。

俺が旅をしている間にも、魔王が増えた。

ヴァレンタインと、もうひとりはお名前も覚えていないが。

まあ名前を覚える価値もない程塵だったということだろう。名だけの弱い魔王などには興味がない。

そう言えばヴァレンタインはおそらく従者の方が本物だろうな。本人としていた方では弱すぎると思っただが、従者はそれなりに強かったしな。

ギイやミリムは気づいているだろうが、ラミスは絶対に気づいてないだろうな。

最近ラミスが少しずつ大きくなっている。おそらくもう少しで全盛期とやらになるのだろう。

それから弱い魔王がたくさん入ってきたりなどしてルールが出来た。

茶会は気づいたら魔王^{ワルブルキス}達の宴などと呼ばれていたが、あの雑談からこんな大層な名前になるとはな。

あとは天使の軍勢と戦ったな。

アレのおかげで魔王の入れ替わりが激しいんだが、ミリムやギイは問題なさそうだった

た。

勿論俺も、意志のない者共に負けるほど軟弱ではない。

ラミリスは、全盛期とやらは確かに強かったが其れ以外の時はずっと迷宮にこもつてやり過ごしていたな。

時々俺やギイ、ミリムが様子を見に行ったりと面倒だった。

其れから何回も天使の軍勢と戦うことはあつたが、やはり弱いな。数が多いと言うだけだ。

そしてレオンという名の魔王が入った。

あの男は元勇者らしい。存在自体が変な奴だが、それなりに強いだろう。ギイのお気に入りに入りだしな。

そう言えばギイは男ではないらしい。性別が自由に変えられるんだと。一度女の姿になつてもらつたが、傲慢さは変わらずだった。

其れからもなんか色々出たり入ったりして、今では十一イレヴン魔王などと呼ばれてい

る。
ギイ、ミリム、ラミリス、俺、デーノ、ダグリユール、ヴァレンティン、レオン、あと3人だな。

名前は言わずもがな。弱い、ギイのお気に入りが居たような、。まあ俺に興味はな

い。

次の天使の軍勢が来るまではおそらくこのメンバーで安定するだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※

あれから数十年経ったころ、ジユラの大森林を庇護していたヴェルドラの気配が消えた。

ヴェルドラとは何度かあったことあるが、ダグリユールと張り合っているようでは俺には勝てない。

無限牢獄からはギリギリでヴェルザードが出すつもりだったようだし、特に気にしていなかったが。何があったのか。あいつのことだから勝手に消滅したという事はないだろう。第三者の干渉があったと見るべきだな。ギイもおそらくそうだと考えていたし。

俺はすることもなく、ミリムやラミスが遊びに来た時の相手をするか、ギイと話すか、自分の領地でじっとしているかしてたんだが、最近ジユラの大森林に魔物の国が出来たらしい。

領主はスライムなのだと。ヴェルドラが消えたことといい、スライムが領主になったといい、何か関係があるかもしれない。

その国は人間の国やドワルゴンと友好を結んだらしい。その御蔭で技術力も素晴ら

しいのだとか。

もう少し国が発達したら言ってみてもいいかもな。

もう一つ気になることと言えば、イングラシアに自由組合が出来たことだな。

グラブドマス自由組合総帥というのがいて、異世界人らしい。人望も大層熱いようだ。

西方聖教会との協力もあり、魔物の討伐量が増大しているようだ。やはり異世界から来るものというのは他よりはマシな強さのようだ。

俺も異世界と言えば異世界から来たが、ギイによると例外なのだそう。

俺の前世の話を少ししたが、元々力を持つていたのは特殊らしい。その影響で転生した時にいきなり究極能力を得られたとか言っていた。

最近はミリムやラミスが煩い。どうやらあのスライムと友達になったらしいが、コイツラが仲良くなるという奴には興味が悪くなる。

ついでにそのスライムは魔王種になったらしい。このままいけばいつか魔王になるのだろうか。

ミリムによれば、あのスライムは魔王になりたがっていないらしい。勧誘したのだと。馬鹿だな。

※ ※ ※ ※ ※ ※

魔王達の宴の招集がかかった。招集したのは弱い奴だったが、内容があのスライムについてらしい。

ギイにも念を押されたことだし、雑魚の招集だが行こうと思う。

最近はそのスライムが真なる魔王に覚醒したり、ミリムが何か企んでいたりと起こっていたからな。おそらくこの魔王達の宴で決着がつくだろう。

取り敢えず行くか。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

俺の名はリムル・テンペスト。最近真なる魔王とやらに覚醒した、可愛いスライムだ。会談中にラミリスが突然訪れて「この国は滅びる！」的なことを言われてどうなるかと思っただ。

この魔王達の宴はクレイマンを殺すのにいい場所だ。他の魔王も見れるわけだし、注意深さは必要だが。

そんな俺は今大きな円卓に座っている。

今俺以外には二人の魔王がいる。

一人目はラミリス。

一応古参だからなのか奥の方に座っている。まあアイツは放置でいいだろう。

もう一人は俺の正面に座っている。

コイツはヤバイ。もう魔素云々でヤバイ。隠し方がヤバイ。表に出ている実力はカリオン並だが、その本質はわからない。

コイツは明らかなる別格だ。コイツが“ギイ”だな。

その後、ダグリユール、ヴァレンティンと入ってきた。

ヴァレンティンは従者が本物な気がしてならない。

そして次に、デイーノ。

ラミリスを弄ったと思えば、自分の席についた途端、寝た。

古い魔王みたいだが、やる気が全く感じられない。

何気に解析を妨害してくるので、油断は出来ないが。

次はフレイ。

取り敢えずEr……俺は紳士だからな！

従者も色々とすごかった。獅子の仮面を付けた奴がいたが、カリオンではないだろう。
う。

お次は金髪美女。コイツがレオンらしい。

シズさんについての会話をしたあと、特に話すこともなく黙った。

そして暫くした頃、また一人魔王が来た。

残っている魔王を考えれば、コイツがウルキオラなのだろうが、ヤバイ。

ギイと同レベルでヤバイ。顔は翡翠の紋に左頭部に仮面があり、なんとも特徴的だ。表情は全く動かないが。

ギイと何かを話し、アイツも奥の方に座ったから古参なのだろう。まあギイと同格だしな。

魔素を押さえているらしいが、ギイと同様少しだけ出しているようだ。その表情も相まって、威圧感がパない。

それから40分ぐらい経った頃、クレイマンとミリムが来た。

※ ※ ※ ※ ※ ※

ミリムと塵が入ってきたかと思えば、塵がミリムを殴った。

ミリムのことだから操られているわけがないし、何か企んでいるのだろう。今のように我慢出来たと思うが少しイラつくな。

試しに魔素を少し出そうか。もうこの塵はさっさと殺すべきか。

「面倒なことするんじゃないやねえぞ。ミリムの企みが見れなくなる」

「、そうだな」

ギイに止められた。まあ良くわからないが、あの塵はスライムが殺す気のようなだ。

ミリムの企みのついでに様子見しておくか。

あのスライムかなり強いな。究極能力を持っているとは思わなかった。しかもヴェルドラはやはりアレに関係していたか。

弱っているように見えるが、魔素を押さえているだけのようだ。些か性格が変わり過ぎな様な気もするが。あのスライムが特別だ（ユミルク）と言うことにしておこう。

スライムは魔王に認められたようだ。

個人的にはミリムが所々でガッツポーズをしているのが面白かったな。

その後、弱いやつがミリムの配下になると言った。俺的には丁度良いと思う。

そしてスライムの一声により、十一人ではなくなったことが指摘された。

「新人のお前の仕事だ」

名前などに興味はないし、ラミスが賛同しているのでこれでいいだろう。ギイは悪魔の笑みを浮かべている。あのスライムは気の毒だな。

結局はあのスライムのネーミングセンスが高かったため、（エニアグラム）九星魔王とすぐに決まった。ディーノが大げさに感激していたが、確かにすごいと思う。

それからはほとんどの物が去っていき、いつもどおり俺とギイのみになった。

「あのスライムは究極能力を持っていたな」

「ああ、しかもアレは大罪系だ。他にも何かありそうだし、アレは強くなるぜ」
「少し興味深いな」

「お前が言うなんて珍しいな。次の天使の軍勢の進行では、あのスライム含め全員残りそうだな。楽しくなってきたぜ」

「俺は例の魔物の街とやらに言ってみようと思う。ついだが、少し前にレオンが話していた協力者についてだ。余り関係ないかもしれないが、自由組合グランドマスター総帥には気を付けたほうがいい。あれは胡散臭い」

「そうか。まあレオンの不興を買う訳にもいかねえし、気にだけ留めておく」
「ああ。じゃあ」

「お前も油断するなよ。最近の色々と怪しいからな」

ギイの忠告は耳に入れておくとして、いつ魔物の国に行こうか。
人間共の国に行くときの姿で行ってみるか。

開国祭

この間の魔王達ワルブルギスの宴でいつ魔物の国に行こうか迷っていたが、丁度良い機会が出来た。

俺が魔物の国に行きたがっているのを知るミリムが、近々魔物の国で開国祭とやらが開かれるので其れに来れば良いと行ってきたのだ。

その開国祭では色々な出し物が行われ、其のうちの一つに武闘大会があるらしい。

其の武闘大会には、魔王リムルの配下数名と各国の人間共が参加するようだ。

俺には部下もおらず興味もないため他国の情報収集は基本行っていない。警戒するべき者や、急に情勢が変わったりした場所の事は嫌でも耳に入ってくるので、特に問題もないのだ。

なので、魔物の国も具体的にいつ行こうとは決めておらず、開国祭の話もミリムに聞くまで知らなかった。

武闘大会に参加しない者も多くいるようだが、俺の場合は見るだけで大体の実力がわかる。戦力の確認とまではいれないが、祭りとやらを楽しむついでに各国の重鎮やスライムの配下の实力を見るのは良いかもしれない。

だが、俺が魔王だと知られた状態でいけば、色々と面倒だろう。俺の場合は完全に人間に視せることも可能だ。俺が完璧に視せようと意識していれば、真面目に俺に気づくのはミリム、ヴェルドラは勘で気づくと言ったところだろう。俺の人間の姿は仮面と仮面紋と孔をなくしただけなので、魔王としての俺の姿を見たスライムもおそらく勘で気づく。

其れ以外の条件で気づいたものがいれば、大した者だろう。

取り敢えず、ミリムには俺が開国祭に行くというのは黙っていてほしいと言っておいた。其の方が後で面白いことになると言っても言っておけば、ミリムは言うことを聞くからな。

まあ、一番の目的は魔物の国の飯なのだが。ミリムによれば最高に美味しいそうだ。

ギイの配下の用意したものとどちらが美味しいのか、魔物の国の方が上手ければ、ギイに自慢してやろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※

今日はいよいよ例の開国祭の日だ。

スライムの挨拶を市民たちに紛れて聞いていたが、其れなりにカリスマ性はあるようだ。俺からしたら甘いように感じるが、そもそもの考えが違うので俺は特に何かを言える立場でもない。素直に拍手をしておいた。

演説が終わった後は自由行動となるわけだが、歌劇場という場所で演奏会が開かれる
そうだ。

俺は静かなのが好きだが、音楽は嫌いではない。まあ煩くない音楽に尽きるが。

良い音楽というのは俺の中では精神を安定させ、思考を加速させるものでもある。

貴族に紛れて演奏会を聞いて以来、暇なときなどはよく聞きに行っていた。なのでこ
こでも演奏会が開かれるというのなら、聞きに行かないという選択肢は存在しない。

歌劇場に来たわけだが、ルミナスが居るとは思わなかった。

演奏会が終わった途端一番に拍手したのも意外だ。まあそれ程素晴らしい演奏だっ
たというのには同意だが。

歌劇場に来る前に焼きとうもろこしというのを食べたが、其れも中々のものだった。
見た目は質素で唯のとうもろこしだが、味は、手入れされた最高級の料理ほどではない
が美味い。

これからは暇になったら魔物の国を訪れるのも良いかもしれない。

だが、懸念するべきは、この国の技術発達の速度だ。このままいけば遠くないうちに
天使の軍勢が襲ってくるだろう。

まあ演説の時に見た感じでは、配下もそれなりのようだったし大丈夫だろうが。まさ

かギイと同類の奴が居るとは思わなかったが。

まあ其奴もギイと比べればまだまだなので俺にとって驚異でもなんでもない（原初という時点で性格は油断できないな）。

演奏会の後は昼食の時間だったため焼きぐをたくさん堪能した。どれも良い焼き加減でうまかった。

歴史資料館のようなものもあつたが、特に興味もないので通り過ぎ、しばらくはずつと食べ歩きを続けていた。

途中でルミナスと対面したが、流石に向こうも気づいたようだ。まあ魔王だしな。其れで俺が意外と食いしん坊だとかこの飯は美味いだとか、ミリムに誘われてきただとかを話して別れた。

ルミナスも随分と満喫していたようだ。やはりこの国はどの方面にも充実しているな。

温泉とやらもあつたが、人も多く、貴族がほとんどだったため行かなかつた。俺が魔王だと知れば一人で入れるのだろうが、大きい風呂には余り興味はない。

俺が飯よりも興味を示したのは武器だ。

俺が始めてもらった魔法武器マジックウェポンはギイに色々教えてもらいながら育てていたら、俺の魔素を大量に含んで神話級となつていた。

ギイによれば、千年以上所持していて、なおかつ俺がギイ並に強かったからこそその結果なのだ。普通はここまでの進化はしないらしい。

この魔物の国の鍛冶屋は物凄く腕がいいようで、希少級を幾つか売っていた。おそらくこの国では既に特質級の制作も成功しているだろう。表に出さないのは当然と言える。

武器屋を見て回り、食べ歩きをして、俺はすっかり武闘大会の存在を忘れていた。

まあ本戦は明日からのようだし何も問題はない。逆に今日ほとんど全ての飲食屋台を制覇したことの方が重要だ。

虚数空間に美味しいと思ったものを幾つか入れておいた。今度ギイに上げて貸しを作ってやろう。

まさかこんなに楽しめるとは思わなかった。スライムに会うのは、開国祭の3日間を満足にすごしてからでも遅くはないはずだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※

開国祭二日目、今日は忘れないよう早めに闘技場に来た。既に観客は山の様だったが。

武闘大会は一応見ると決めたからな。

防御結界は二つ。まあ納得だ。出場者のレベルを考えても、アレを破壊することは不

可能だろう。

そして出場者の説明を聞いていたわけだが、どうやら迷宮があるらしい。

最近ラミリスが忙しいアピールをしながら魔物の国周辺をウロウロしていたので、おそらくラミリスが作ったのだろう。

どうやら其の迷宮ではスライムとラミリス含め、ヴェルドラやミリムも関係していそうだし、開放されたら見に行くか。

出場者に獅子覆面ライオンマスクというのが居たが、どこかで見たことがある気がする。しかもアレに伝言を頼んだというのには口調からしておそらくミリムだ。

大方魔王達ワルブルギスの宴でミリムの配下に入ったものだろう。弱いやつは記憶に残らないからあくまで推測でしかないが。

戦闘は見たが、ほとんどが大したことはなかった。

だが、あの勇者はかなり特殊なようだ。普通の勇者と比べて、強さとは別次元で違う雰囲気があった。

※ ※ ※ ※ ※ ※

三日目。今日は武闘大会の決勝と迷宮開放の日だ。

締めの日としてのスケジュールは完璧だと思う。いかに客に金を落とさせるか、といった思考さえ見え隠れしてくる。

決勝は、ホブゴブリンと勇者だ。

もはやアレはホブゴブリンではないが。嵐呀狼と合体している時点で種族不明だ。まあ制御出来ずに壁に激突したがな。

ミリムが合体後の姿を見て叫んでいた。とてもミリムらしい。

あの勇者はやはり特殊なユニークスキルを持つているようだ。洗脳に近い気もするが、アレに其れをしようと考えた頭はないだろう。実際の実力は皆無だ。

まあ存在自体は面白いし、ギイが食いつきそうな感じではあるが。

アレがあそこで負けを認めたのはアレにとつての最高の選択だろう。弱すぎてバカバカしい気もするが、逆に不思議な気もする。

ギイやミリムは勇者が特殊だと言っていたが、其れを実際に感じたのは今回が初めてだ。

其れなりに充実した決勝だったな。

次は迷宮開放だ。だが、どうやら体験だけのようで、正式開放は後日らしい。

俺は体験などに興味はないので、また食べ歩きをすることにした。

迷宮を普通の人間として攻略するためにも、今日スライムに会うというのはなしにしようと思う。

そろそろ新しく食べるものもなくなってきたのだが、俺にはまだやりたいことがある。

記者になりすまし、各国との取引の様子を見ることだ。

せっかくこの国に来たのだから、知りたいことは全部知っておくべきだ。

.....

この光景は共ソリタ・ウイスタ眼界を使つて魔王たちに見せてやりたいな。

記者という存在を上手く使いつつ取引を有利に勧めている。

結構な話術だと思うし、あのスライムとの雑談は楽しそうだ。

実際に対面するのはまだ後にするつもりだが、この開国祭では随分と魔物の国の良さを見せつけられたものだ。

商魂たくましいな。

グランドマスター
ここでは自由組合総帥を目にすることも出来たわけだし、いい収穫がたくさんあった

な。

次にこの国に来るのはおそらく正式な迷宮開放後だろう。

スライムやヴェルドラ、ラミスを驚かせたいらしくミリムに見た目は一般人として攻略するように言われた。

攻略速度は通常でいいらしい。

※ ※ ※ ※ ※ ※

俺の名はリムル。

ついこの間試験開放の後にマサユキの助言を受け、正式に迷宮開放をし、配下を集めるといふディアブロを送り出したばかりだ。

ついに、マサユキ一行が三十階層突破者となった。表では。

実を言うと、昨日の昼頃訪れた無名の冒険者が、半日で五十階層まで到達したのだ。流石にこれを他の攻略者に公表するわけにはいかず、表ではというわけだ。

本来だったら物凄く焦るんだが、俺達は其の姿を見て瞬時に納得した。

オーラは唯の人間そのものだったが、姿はウルキオラの面影がありすぎるのだ。

初めに気づいたのはラミス。

ウルキオラは仮面と翡翠の仮面紋、首下の孔を無くしただけの状態だったので、長年一緒に居たラミスが其の既視感に気づいたのだ。

だが、やはり俺の予想した通りギィ並だ。

智慧之王^{ラファエル}さんでさえ魔素に関しては一般人にしか見えないらしい。とんだ恐ろしいヤツだ。

たまたまミリムが来ていたのだが、急に雰囲気^ギがぎこちなくなつたため、コイツが一枚噛んでいるのだろう。

大方俺たちを驚かせたかつたみたいだが、ウルキオラの外見が適当過ぎたためすぐにバレル、なんてことは予想外^ギのようだった。

正体不明の凄い人という感じにしたかつたらしい。

結局流石は魔王と言つたところか、俺の配下やミリムの連れてきた竜を一瞬で倒し、一日でヴェルドラが担当するこの階にたどり着きやがった。

全くの化け物である。

「リムルよ、我、ウルキオラとは戦いたくないんだけど」

などと言っているが、ここまでくれば仕方ない。

ラファエル
智慧之王さんも偽装を見抜けなかったことを悔しがっているようだし、ヴェルドラと戦っているところを見て少しでも技を盗んでやろうじゃないか。

まあ、当然盗めなかった。

この迷宮で一番の権限を持つラミスが脅され、情報は遮断されて戦闘シーンを見る
ことが出来なかったのだ。

結局、ヴェルドラが部屋をでていき、ボコボコになって帰ってきたのを見ただけだ。
未恐ろしい魔王である。

ヴェルドラが伝言を頼まれたそうで、

「この迷宮は割と楽しめた。開国祭の時の屋台をまたやってほしい。あと、近々お前ら
が集まって会議をしている時に現れるかもしれない」

だそうだ。

うん、まず開国祭来てたのかよ。おまけに屋台つて、なんかイメージと違う気がする。まあ一番重要なのは最後だが。

アイツが本気で隠れようと思えばさ、、、

《解》 個体名：ミリム・ナーヴァが居ない場合100%の確率で会議室に現れるまで誰も気づかないでしょう》

うん、だよな。

一体あの魔王は何を考えているのだから。

初めの印象は物凄く無表情という感じだったが、ミリムの策略に参加している辺り割と悪戯好きなのかもしれない。

ディアブロを冥界に送り出したわけだが、早く帰ってきてほしくなった。

その後智慧之王^{ラファエル}さんがラミスから迷宮の干涉権限をゲットして戦闘を解析鑑定したが、驚くことに一瞬の爆発的な魔素の放出以外は全て体術で戦っていたようだ。

其の魔素の放出は、きつとあたったらヤバイやつなのだろう。

俺は魔王の恐ろしさをしかと感じました。

※ ※ ※ ※ ※

幕間―白氷宮にて―

「よお、お前から来るなんて珍しいな、ウルキオラ」

そう、本当に珍しい。魔王^{ワルブルギス}達の宴以外で会う時は、基本ギイが呼んだりしていたのだ。まあ其れすら数えるほどしかないが。

「久し振りだな。実はこの間魔物の国の開国祭とやらに言って屋台とやらで売ってるものを食べてきたんだが、其れをギイにも食べさせようと思っつてな。高級料理以外の物を食べるのも大事だぞ」

あの国にコイツが興味を示していたのは知っていたし、大方ミリムに誘われでもしたのだろう。

初めて会った時は無愛想だが強いやつ、そんなイメージだった。

だが、此奴も自分では気づいていないだろうが、旅から帰ってくる頃には少し変わっていた。まあ長年の付き合い合いの奴じゃなければ気づかない程の誤差程度のもだった

のだが。

旅の飯がうまかったらしく、其れなりに食い意地の張った奴になっていたのだ。性格も、変なところで真面目だが、ある程度の悪戯好きでもあるという、かなり以外な性格だということが発覚した。

其れがほとんど表にも内面にもでていないのが面白い。

「焼きとうもろこし、焼きそば、たこ焼きだ」

そう言つて俺の目の前に3つの品を取り出し並べる。

「見た目は質素だが、美味いぞ」

「そうか、じゃあ貰つておくぜ」

俺も並べられた其れを虚数空間のコピーにしまい込む。

「ああ、あと、面白い勇者が居たぞ。ついでにお前と同類の奴も。黒だった」

黒。やはり俺の予想通り、原初ノックの黒ルが配下に居るようだ。アレに名前をつけるなんてあのスライムは面白い奴だ。

だが其れより、

「面白い勇者？」

「勇者マサユキといつて、全然強くないが、雰囲気というか魂そのものが他の奴らとは違う気がした。スキルも面白そうな物だったしな」

「へえ、お前が弱いのに名前を覚えているなんて珍しいな」

此奴は基本的に一定以上弱いやつの名前は覚えていない。おそらくフレイヤカリオンと言われても誰だかわからないだろう。

弱いのに此奴が覚えているということは、其奴の魂の格がそれ程印象に残ったのだろう。

勇者マサユキか。会いに行くつもりは今の所ないが、誰かの転生者だろうか。

「あと、自由組合グランドマスター総帥も居たんだが、やはりアレはきな臭い。あのスライムも疑っていたようだしな」

「そうか。楽しめたのか?」

「ああ。あそこの国はとにかく料理が美味いから、ギイも食べに行ったらどうだ? 紅茶もきつと美味いぞ」

「そうもいかないぜ。魔王同士は基本的に不可侵だし、俺の目的に影響しない限り俺は行くつもりはないからな」

「そうか。彼奴は暇つぶしには丁度良いと思っただが。ミリムもラミスも楽しんでるしな」

「フツ。だが、あの国の行動で東の帝国が動き出すかもしれねえからな。其れまでは干渉するつもりはないぜ」

ジユラの大森林は位置的にも魔王達の中で一番東の帝国に近い（ルミナスもいるが）。今はまだ大丈夫だが、あのスライムは配下に名付けまくっているようだし、配下の中にも魔王種が大量発生することもありえなくはない。

まあ推測の話だからこそ、会うつもりもないのだが。

「ギイ。俺は今お前に色々情報を渡したことになるからな。これで貸し一つだ」

結局はこれが目的だったりもするので、なんとも言えない。

まあウルキオラやミリム、ラミスであれば貸しなど無くとも助けるのだが。

「へっ、よく言うぜ。俺だってお前に貸しの一つぐらいあるからな、相殺だつっ一の」

「フン、まあ話したいことは話したからな。俺はもう行くぞ」

「ああ」

結局一方的に話された感じになったが、まあ彼奴の言う通り情報だつて入ったわけだし、まあいいか。

彼奴の話す感じだと、天使の軍勢が早めに来そうだからな。

あのスライムがどう対処するのは見ものだけ。